

一、一心の体徳

「世尊我一心、帰命盡十方無碍光如来 願生安樂国」と天親論主は論の建章に於いて、その超世無上の大信心を「我一心」と告白せられた。

この一心こそは、大悲本願を全うしたる如来回向の信樂に外ならない。この一心はやがて、礼拝、讚嘆、作願、觀察、回向といわゆる五念門の宗教となつて行者の上に展開されて来るのである。

信心は念仏である。信心決定して念仏申すということは、浄土真宗の全てである。しかるに、この信心決定の念仏より、一切の尊ばるべき宗教生活の始終が生まれるということは、翻つてこれをいうならば、一心こそは、無量の徳を内具しているということである。無量の徳の内具とは、行巻に、「諸の善法を撰し、諸の徳本を具せり、真如一実の功德宝海なり」と説かれるのがそれである。しかるに浄土の真宗にあつては、全て一切の功德は、これを行者の発願成就すべきものとせずして、いわゆる法体の功德、即ち一切の功德を如来の本願名号の内容として仰ぐのである。この如来本願の無量の功德こそは「この大功德を一念に弥陀をたのみ申す我等衆生に回向しますます故に」(御文章)そこに一心即ち信樂を成ずるのである。されば、一心が無量の徳を具するとは、如来の本願に無量の徳を内具するということである。

時計の長針短針が廻りつつ時刻を指しているのを見れば、時計は至つて簡単なものである。しかしその裏には、精巧なる機械があつて動いている。念仏行者の、「信心決定して念仏申す」相は簡単である。しかしながらその奥には、如来浄土の本願の法、正しい精巧なる法があつて動いているのである。これより明かされる所の、名義撰対、即ち、九法四心の法門こそは、一面、還相回向門の世界を説くものでありつつ、それは又、行者一心の体徳を示すものである。漸を追うて明かにされるであろう。